つて飛出す。敵ピッチ早く我に先ずる事一艇身。彦根軍一系亂れず悠々として敵に先導を許す。ミッドルに至るや、舵手の一聲、底力ある赤鬼の頑張りは一漕毎に敵を拔き、ラストヘビーに入るや持有の急調を以て艇を躍らして進めば、敵の艇速鈍り、無慘や數艇身の差を以て彼再び起つ事能はず。我軍勝つ。

第二回戰（八百米）

白　滋賀師範　一コース　一着
赤　彦根中學　二コース　二着

生か死か。この一戰こそ本大會の准優勝戰にして敵は同じ湖上の覇者奉公團にして積年の怨敵なり大敵なり。然れ共彼とても同じ人間！　新春以來辛苦を嘗めて鍛へし此赤鬼健兒の鐵腕いざ示さん午後一時二艇相並んでスタートに着く、あゝ其の瞬間白煙一發ブイを離れて一本一本決勝線に突進す斯界の老練家たる彼は如何なる策戰か最初より猛烈なるヘビーを決行し臣大なる身軀よりして、す晴しい進行を見せぬ。これが爲約一艇身先んぜられしと雖も、何を小癪ないざ見よと、ミッドルヘビーの聲と共に美事艇首を並べ力漕に力漕し、我一漕せば彼も一漕激烈なる肉薄戰を演じしが、六百に到る頃敵を壓しラスト一擧にゴールに入らんとせしが、競漕の古狸彼は体格の偉大なるを利用しピッチを以て之に當り、あと五十米の頃より頻りに我を追ひ我得意の秘漕數本今將に決勝戰に突入せんとする其の刹那、一發の號砲天高く冲し我が事止みぬ。嗚呼如何にせん成運既に盡たり。浪にもまれ風に曝され、あらゆる辛苦を嘗めしも哀れ一の谷の泡と消ねぬ。想ふ敗者の愚言なるも其の昔行く所として敵なき稀世の大英雄ナポレオンも、武運盡きては如何にせん。あはれ孤城落日海上遙かの孤島に風寒き夕朝に消ゆゝ泡雪の命も待たで倒れたり。勝敗は唯是時の運とは言ひながら、無念遺憾の極にこそ。今は我等の運命を定むるは唯武德の大會一あるのみと、最早確く決心の色を浮べ、耻を忍び、身に余る優過を受けし先輩諸兄の御好意を謝し恨を呑みて歸彦せり。

終に望み先輩諸兄の御盡力と、應援團諸君の熱誠なる御後援とを深謝す。

（舵手記之）

出漕者氏名

舵手　堀口　兵次　整調　藤村助三郎
五番　宮尾源二郎　四番　川添助二郎
三番　坂東　正明　二番　林　茂雄
一番　原田　政藏

琵琶湖周湖之記

第一選手舵手記

大正辛酉七月二十七日より三日間、我等第一選手七名は池田部長同乘、八月三日石塲濱に開かるゝ京大國際漕艇倶樂部出催全國中等學校優勝競漕大會に參加の爲、琵琶湖一週大津に向はんとす。

有明の月は老松の梢に懸り皎々として白く、星は燦然をして天空に滿ち、四隣寂寥籟默して微風だになし。

此の時に當り偶々當港波止塲の汀に踞る二三の黑点の喃々の聲を聞く、之即ち兼て約せし同航者廻湖の壯快を空想に畫き、滿腔の喜悅を黑面に現はして互に語笑せるなりき。

少焉にして衆揃ひ愈々午前五時愛艇比良號の纜を長曾根波止塲に解き、一葉の端艇を茫々たる湖の鏡面に浮べぬ親しくコーチを受けし三橋君より種々遠漕中の注意を聞き、其他先輩及應援團諸君の激烈なる吉別の辭を受け、朝の幕を破る萬歲に送られ、必ず月桂冠をと心の裏に遠漕第一のオール輕く靜氷を蹴つて彦根を出發しぬ。

伺ふ所は西江州大溝にて、進路を遙か白石嶋に靜寂たる朝の水海に日頃の鍛へし腕を無雜作に十分漕いでホット息ふ、顧れば多景嶋は煙霞彷彿、靉靆模糊、嬉々として余等の行を迎ふるに似たり後ふり反り見れば　東の平野は一帶の霞に蔽はれ金龜山は黛をこらし、鬱蒼たる老松巨柏の間に城閣の隱見するを見る宛然余等の壯行を送るに似たり。

既にして東天漸く白く衆欣々然たり。此の日降らず照らずの最好のボート日和なり。烈日の水平線上を壓せぬ間に一氣に琵琶湖横斷せんものと緩調を以て意氣揚々三拾分のロングを引けば、艇は早く彦根を去る五十數町西の湖中にあり、初め縹渺の間に認めし多景嶋我が右に迫り島中に忽然と

して屹立す。大巖石に刻める南無妙法蓮華經かすか朝の大氣を通して望み得。伊吹山。鍋尻山両立して其間の山脈低く連り、小波寄するなつかしき故郷も次第に遠ぎかり行く、日頃錬へに〳〵し其の腕は、艇を躍らして進め漕手は些の疲勞の色も表はさず士氣益々昂り、部長亦莞爾として艇中和氣藹々たり。

次で二本漕數回重ね、續いで力漕力漕に、ラストヘビーの練習心地よく、白鳥を追うて白石嶋にたどり着きぬ。伯げば湖中の巨岩其色雪の如きが屹然として高く聳ゑ其傍に三つの稍小なる巖あり遠くよりこれを望めば白帆の湖上に浮べるが如し巖上一つの樹木なく雜草の處々に生ずるを見るのみ、この頃曙光漸く湖上を照し、金波銀波織るが如く、杳として其の涯を知らず。舟中にて一同少憩す。トッポに立ちて長嘯し湖中の美景を一眸の中に收む豈快ならずやと恍然として我我忘る。

目ざす土地に着かばやとあかぬ眺めをおしみつゝ西へ西へと六橈は波を蹴る。西するに從ひて見慣れぬ西江川の白壁樹間に隱見す。艇速鈍ると見るや、たちまち起る「頑張れ」聲に、端艇は音をたてゝ進みこのとき鮮魚艇中に飛入る。一同大いに喜び芽出度前兆と勇を皷し、更に一本一本目的地に向ふ。近づくに從ひ其の風景の變れるに驚く。白砂は汀に續き、綠の松負ふ山はただちに岸にせまり、瀬戸海沿岸の風景も餘所ならずと思はしむ日漸次高く、暑く次第に益し、汗は額を傳ひ共痛漸く加はるされど大溝の町前に顯はれ岸の景一刻一刻更まるを見れば、何をか逡巡すべき舵手の叱咤、部長の激勵に最後の頑張りをヒロング四十分間、ラストヘビー急調を以て五分間、遂に對岸大溝町に着きぬ。時に午前九時半、皆其の余りに早く來しに少なからず驚き、内心喜びの笑みを洩らす、艇を河つたひに宿の前に來り繫ぐ。部長以下旅宿に足なげ出し晝飯を喫する時、一同横臥して第一日の遠漕を回想する時、過ぎし苦痛はいづくにか去り欣喜として樂しむ。

夕陽沒せんとする頃宿を出で、大溝港に艇を乘り出だし約五分間力漕一コースの練習をなす。序で西南約二拾町の地点に鎮在ます白鬚神社に

汀傳ひに詣うで武運長久を祈りて歸る。入日に山山赤く水青く、異郷の夕暮一入の感あり。夜の幕は下りて棧橋に輝く燈臺の光薄く、沖を通ふ小蒸汽の汽笛かすかに聞ゆ。

港の町を散策後就寢す。九時前なりき。

二十八日

寢なれぬ枕も終日の疲勞にてグッスりと熟睡し東天白き否赤き頃、あわて出し種々準備怠りなく愛艇の人となりしは七時半なり。空名殘なく晴れ曙光は暑く、故郷の天より照り付ける湖上靜かに些の微風だになし。本日の航路は西江州の岸傳ひにて、汀にせまる綠山は其の影を深青色に湖上に寫し、中間を白砂帶の如く連る。右方に鎭坐の白鬚神社にサリート彩に大溝の町を後に、第二日の旅に着く。左方は遙か八幡山に續いて東江州の重々たる山を觀め、目的地堅田はと見れば煙霞の中に明かならず。先づ十分間のロラブを引き腕を慣うせば、昨日に倍する暑氣は太陽の直射に益々加へ、一同流汗淋漓、ユニユホームは早やビッショリと濡る。されど元氣は一倍艇は十町二十町南に南にと進む。さらに一鞭力漕二本を以て走らせば艇は名所近江舞子を訪ふ。遙々打續く白砂には天人を戯れに造りしものか、絶妙奇形の老松は虎豹め踞るが如く、蚪龍の登るが如くにて其の濃綠の靈を白砂と戰はせ青水と競ふが如し。背後には高山聳立して其の美景を蔽ふに似たり。一同上陸し涼しい松影、奇麗な砂の上に息ひ、少々時刻早やけれ共晝食の辨當を喫志て充分、戰鬪準備をなし一氣堅用に向はんとす。

見れば小松一帶の長汀には鰣網廣く横たはり、數十人の漁人達はそれ〳〵午後の仕事に忙しげに汀を彼方此方と走り歩き平和な漁業村を思はしむ

再び艇上の人となるや、日は天に高く、水平線上を照らしシート、オール、ストレッチャ總て觸るゝもの灼熱せられ、湖上に漂ふ水も油の如く、風は地形上些の波も立てず、之に對する漕手は麥藁の日覆もなく、鉢巻一筋炎熱の直射を意とせず尙も續くコースに經驗なき人の到底想像志得ざる事ならん。自重物に動ひざる整整五番！、堅忍不屈深謀に富む三番、四番！、元氣潑溂青年の燃ゆ

る血汐に滿つる一番、二番！　是等漕手はいづれも本校一粒擇りの精神的の選手なり。故郷には我々は期待せる六百健兒あり。「必ず頑張つて來てくれ」と言ひし先輩の言葉もまだ耳にのこれり。嗚呼何ぞこれを思ひ彼を想へば逡巡すべきや。一本の漕法も、一本の力漕も六百の健兒のオールなり。名譽の歴史を保持し行く責任あるオールなり炎熱も疲勞もこの精神には敵し難きか。叱咤する舵手の聲、一漕毎に起る水の響、艇首の水を切る音。其の他には箱の底の樣なる陰鬱な、頭を壓せらるゝ如き水平線上には聞くものなく、時々聞ゆるボーヽる唸る蒸汽船の笛は一層氣を腐らす。小松を過ぎて以後は艇は冲を通ぎ、愛艇比良は其の名の起る比良連山に別れを惜み、蒸し暑き中を二本漕四十分間のロングと漸次目的地に近づく。四隣は漠として讃美する處なき湖中、美しきものは七戰士の心に潜む愛校心のみなり。

堅田以東二浬、和邇川の岬に上り清水に咽喉を潤しヤット我に返る、顧みれば近江舞子は模糊の間にあり。知らずして通り越せし山間に、濤々と布を引ける瀧は、村人に敎へられ始めて小松の瀧と知る、其の雄大なる遙かこの遠方より眺め得。

腕は疲れ「シリ」は猿の如く、手拭は汐辛く。ユニユホームは洗濯せし如し。されど太陽の直射は愈加はり何物をも溶かさでは置かざる勢なり。練磨するは此時ぞ！自信あるラストを養ふは今せ！、と四十分間のロングを以て一息に堅田に至る。途中幾艘も和船を拔き、西江州通ひの氣船と競走し、ラストヘビー美事にやつとにオールを流す。斯くして蘆多き浮見堂の横に艇を繫ぎ宿に入る。夜一浴の後暗い街を散策して波止場に至れば、點々たる大津の燈火を眺め衆默然たれ共心中何者かを期せしならん！、　就寢八時

二十九日

起床五時。まだ薄暗き蘆荻の間を露繁き端艇に乘じ淨き大氣の中に墨繪の如く屹立する浮見堂の下を朝の練習に出づ、眼を放てば四隣は漂渺たる細漪織るが如く、霧深く籠めて艇の行くに從ひて薄らぐ。微風面を吹き、薫香漂ひ、爽快なる事わも云はれず。少しく沖まで腕を慣らしつゝ漕ぎ、其處より岸邊まで約千米と思しきコースを定め、スタート除ろに、ミッドルに漸くラストヘビー急調にて五分間の力漕練習を行ふ。朝の靜寂を破る舵手の聲ラッチの響、深奪を驚かし、水禽の夢を破る、

餘速を艇中に仆れて陸を眺むれば、部長亦双眼鏡片手に突堤上に佇み此方望まるゝを見る。

再び宿に歸り朝食を終へ部長同乘愈々雌雄を決すべき大津石塲濱に乘込まんとす。本日は一同堅く約し、今日の航程四里を直行一氣に大津入りせん事を誓ふ。

時に午前七時。宿の好意を謝し、レディーの聲と諸共に名所を後に白波を蹴立つ。十分、二十分漸次縣廳聯隊のバラック等視界に入り來る。舵を其方に進むれば、右手には老松唐崎の濃き綠りを眺めつゝ、左手に長き瀨田の橋、近江富士を送りつゝ近くに展開された大津の街に勇氣百倍遂に滋賀の都に着きにけり、この大ロングの時間一時間と五分にて、最後に目覺しきヘビーを以て周港の最後の花をなせり。珍らしくも此の日風起ち浪騷ぎ、艇動搖少からざれ共、舵手は慣れたり、漕手ば達者なり、無事艇を湖内濱船の波止塲に繫いで。時に午前八時半なりき。

思へば壯なる哉、此の周港！、快なる哉我が思出！、全三日間些の故障もなく無事會塲に來り此の擧を終へぬ。果して此の擧の益する所ありきや？、後世一同深く感謝する處ありし也。

一九二一年八月

七月廿九日午後　會塲石塲濱には多數先着諸校の練習振りを見る、高知師範、奉公團、德島中學、米子中學、いづれも斯の道の猛者、此濱獨特の波浪をものともせず、大學艇に乘じ、右方左方に漕ぐを見れば周港の疲勞も何處へか腕は鳴り、血は躍り出しぬ。自艇を出でし部長、同乘第一回のコースを引きしに波高かゝりしも好成績を揚げたり

七月三十日第二選手來津意氣衝天の思あり。

愈本日より大學艇に乘込み、久しぶりにコースを曳くべく所定の時間を待ちて至る。天陰曇にし

て比叡颪白波を騷がしめ、激浪舷に叫きて甚だしきローリングを起し、練習頗る困難を極む、且つ艇は本月二十五日進水爲したるばかりとかの新艇にて、我等の經驗ある艇とは隨分趣を異にし、いづれも我等が漕法に於て難色見わしが、熱心なる練習努力にて漸く自由に漕ぐ自信を得たり。

斯の如き有樣にて本日はコース曳く事能はず、ロングを以て對峯唐奇迄一時間にて往復し、艇に慣ろる事に勉めぬ、午後は數日來の晴天遂に天候を變じて雨となり、宿に籠域するの止むを得ざるに至る。

七月三十一日天色頗る雄渾炎威赫々たり。風亦頗る徵にして湖上いさゝかの連立つあれど、絶好の練習日和たるを失はず本日の艇使用回數三時間。第一回吾人大いに當日のレコードを作らんとして最始のコースを曳く。時間を要する事四分五十八秒第二回ロング及漕法練習。第三回暮色漸く、穩かなりし湖面も大うねりの浪を生ず、タイム四分四十四秒中等學校今迄のレコードなりき。こゝに自信全く生じ敵を呑むの概あり、されど共、米子、德島東北、宇和島、福岡商業いづれも、あなどるべからざる曲者なり。本日宵福岡商業選手、本校端艇借用に來り、吳越同舟九州の快男兒と談る。痛快を極む、

八月一日

練習午前中、タイム四分四十九秒宇和島、德島米子、皆近きに有り。

午後大津交道館に於て出漕選手一同の茶話會開かれ第一、第二及び赤鬼倶樂部選手二十有余名館の一方に大多數を以て頑張る、

荒木京大總長の挨拶、堀田知事、田島博士の訓話、續いて大國法學士は一歲英國イートンコレーヂの選擧とケンブリッチのセントジョンスカレーヂの選擧との競漕中起りし美談を例として、勝利を以て最終の目的となさず堂々たる武士的の競漕を目的とすべく話ありたり、後委員より競漕に關する注意ありて、愈抽籤にかゝる。各校舵手代表籤を撮る。萬場の快漢我敵何處にありと睥睨す。

其の結果

第四回

愛知一中、丸龜中學、彦根中學第二

第七回

德島中學、秋田中學、彦根中學第一

第十三回

互救會、櫻倶樂部、赤鬼倶樂部

かくして第一回戰我敵は、一は東北地方の覇者一は四國の荒浪に育ちし德島、而して練習タイムいづれも我と相前後して恐るべき敵なり。第二選手の敵は是亦勇者にして敵として不足なし。夜一同策戰緻密なりき。

八月二日　本日も會場準備の爲午前中練習す。波無きも驟雨屢來り湖上靄然たり。諸校競漕前日たると、雨とを以てコースを見合せたれど、本校獨り勃勃たる敵愾心、沛然、車軸を流す雨中コースを曳き、委員各校選手を驚かしむ、タイム四分五十秒。和歌山中學亦雨中にあり、彼亦壯とすべし

午後雨止みたれど、狂瀾怒濤修羅の巷となる、されど强き、腕、强き軀何ぞ恐れんや。激波巨浪を打破り、自艇もて單影湖上に漂はす、快又快！

靜な夜の幕は下されたり。雨止みたれど雲早し明日は晴天なれかしと祈るは十人同じ心なりしならん。

國際漕艇倶樂部出漕之記　（堀口記）

曉の風湖面を拂ひ、旅の假寢の夢を破る八月三日。起ちて戸をおせば東雲の空、朝暾麗かに鳴の海は小波の笑を滿へ、西明峯は翠を單めて、けふ……幾多の勇士が晴の戰場に、一段の光彩を放つかの如く思はれき。

噫我等が奮鬪の日、夢寐にだに忘るゝ能はざりし奮鬪の日は來りしなり。齊戒沐浴前の神社に詣うで一同午前八時會場にて行はれし優勝旗返還式に參列す。

時は愈々來り短艇は漣波を蹴つてはしなく湖上に浮ぶ滿艦飾の小蒸氣審判船さては小舟、應援船モーターボート、水上偵羅船等船と船とを縫うて走る、會場附近は應援團、參觀人にて黑山を築き一■毎に緊張し動搖するが覺ゆ。

一回、二回、三回と過ぎ第四回となりぬ、第四回……これ實に我が第二選手が健兒の腕を試すべき晴の戰場なり。敵は名に負ふ愛知一中、四國の

雄丸龜中學だ。あゝ好敵手！腕を較べんには屈竟の敵手なり。

嘲哢たる樂聲、湖上二艇に分乘せる應援團の激辭に送られ、短小倭軀の我選手莞爾としてスタートに向ふ。一瞬間、號砲一發三艇は矢の如く漕ぎ出し、一漕又一漕次第に決勝線に近づく。この頃波浪は滔々音を立てゝ去來し、倭小なる我選手の困難言語に絶す。三百、五百、彼我並行なりしも波の爲思はぬ失敗を重ね、愛知一中に先じられぬラストヘビーに於て猛然追及すれど及ばず。……わが事終りぬ。已みなん哉。流星光底逸長蛇……驀然愛知一中ゴールに入り、丸龜軍我と憤死す。

然れども我第二選手、小軀を以ち、且競漕數日前其の選手を第　選手の犧牲となし、よく奮戰こゝに至りしは、假令彼をして名を成さしめしとは言へ、其の努力、死して後止みし也、幸にこれを諒せよ。

時刻益移り第一選手起つ時來れり。

第一回戰（第七回）……午前十一時……

（青）彦根中學（宇治）　一コース　一着　四分四十六秒
（白）秋田中學（木津）　二コース　三着　五分〇三秒
（赤）德島中學（加茂）　三コース　二着　四分四十七秒

敵は揃ひも揃ひし猛者にして、此の一戰こそ本會の白眉、觀衆熱狂す。應援團及び先輩諸兄の山嶽もづゞるゝばかりなる軟呼に送られ、楠城下の健兒、我歸雖せずんば何を以て第二選手に答ふべき。我勝たずんば何の顏あつて先輩に見ゑん。時に風風ぎ湖上激瀧たり。今や合圖船に引かれスタートに着く。

突如一發の白煙「スタートヘビー」の聲諸共脫鬼の如く突出す。最初の二百米に於ては赤白青の順序なりしも、ミッドに以前白既に敵に非ず、而して依然赤先頭にあり我追隨す、此時五番のビーブフォアーに故障を生せしも、日頃の訓練一つも騷がず悠々五本を以て青に逼り、七百、九百に至り互格にして茲に猛烈なる白兵戰を生ずるに至れり。男子將に死せんとするは此時でと奮然最後の勇を振つて決勝戰に突入せんとせば、波も去るもの、我一漕彼一漕、鯢鯨水中に相搏つの觀ありて血湧き肉躍らしむ。最後五十米に至るも勝敗決せ

ず。此時舵手の「無茶苦茶」を叱咤するや、遠漕中苦心練磨せし特典のラスト功を奏し、遮二無二力漕し一ミート、二ミート遂に四國の雄、德島を半艇身の後に、秋田を遙か數艇身の後にゴールに入る。見よ船上に青旗飜翻たるを……而して德島決して弱者に非ざりしや。

第二回戰（第十二回）……午後一時四十分

（白）彦根中學（加茂）　二コース　一着　四分五十一秒
（赤）米子中學（木津）　三コース　二着　五分〇一秒

米子！、米子！、何たる神の戲ぞ。昨年の今日……思ひ出すだに腸を搾る。かの石場濱を望み、俯して相擁し、共に咽び泣きしを見し時……。米子。米子。我等は幾度此の聲を耳にせしか。雨の日。風の日。陰忍慘苦、恥を忍び、垢を包んで日夜復讎戰に肝膽を碎く事半歲。而して今や慷慨の秋は過ぎ、希望の春に遇へり。山陰の驕兒何者ぞ！、寶刀彼が頭に加へん時は到る戰はむ哉、戰はん哉嗚呼戰はん哉時機到る矣。

此時驟雨一過して叡山頭角を顯し、冷風來りて水波起らず「忘れるな！今だぞ！」と叫んだ先輩の聲を後に沈默する二艇は相並んで曳かれて行く燃ゆる血汐を押沈め、今や遲しと待つ時しも「ズドン」と一發審判船上に響きぬ。二艇は狂馬の如く奔り出す。

俄然スタートより猛烈な肉薄戰を演じ、一進一退此の一戰こそ龍虎が玉を爭ふより尙得難し。彼決死を以てせば、我深謀あり。彼四十に垂々とする急調を以て力漕せしも、我悠々とし半艇身の差を以て進みぬ。ミッドルビー一聲、突然我が艇は艇速を出し、七百—八百遂に彼を拔くと一艇身。更にラストに入るや猛然としてピッチを揚げ急遽ゴールを突けば、彼遂に敵せず、三艇身の後に仆る。勝！、喜！、何たる壯ぞ。涙を以て涙に報ゆ。噫々我勝てり。我勝てり。而して我泣けり

優勝戰（第十九回）……（午後五時三十分）

（青）彦根中學（加茂）　一コース　一着　四分五十四秒
（白）福岡商業（宇治）　二コース　三着　五分〇九秒
（赤）東北中學（木津）　三コース　二着　五分〇秒

是れぞ我が掉尾の活動を爲すべき時にこそ。

一はみちのくを果、奧羽の快漢。一は西方三百里外より遠征し來れる九國の覇者。我亦自ら全國

の覇と任ずるもの。いざ中原に鹿を追はん、伊吹山嶺の健兒、この蝦夷と熊襲との狹撃を防がずば屍を曝せ其の湖上に。咄！。此の敵を破らずして、唯か赤鬼を口にする。

湖上の應援船青を覆ふ、舟中二旒の彦中應援旗飜り叫んで曰く、我子勝て！。噫我何ぞ勝たざるべき。

急霰の如き拍手中、鮮なサリユートを終へ曳船に着く。

三度奏樂を後に、湖上を傳ふ應援の聲を遙にスタートに轟然たる音響と共に、强努を離れ、矢の如き三艇は、白百米に於て早や一艇身余を先んじ急調一氣に勝を制せんとす。青之に次ぎ、赤稍々遲る。五百に至る頃白疲弊甚だしく赤長驅先んじ我力漕之に次ぐ。六百—七百次第に、赤、青の競漕は激烈に、ピッチ亦彼我が殆んど等い我十本を叫べば、彼の舵手亦奮勵叱咤八百に到るも雁行す。されどラストに充分自信ある　悠々逼らず、九百米に到るやラストへピーを絶叫し、急調を上げて猛進す。死か勝か。死はいづこも同じ覺悟なれど、赤鬼魂にいかで敵すべき一漕毎にグン〳〵拔き、最後百米になるや彦中獨特の無茶苦茶を以て優勝戰に於て第一に突破しぬ。東北我に續き、福商稍遲れて入る勝！勝！。三度戰ひて三度勝つ。宿望に成り喜々として咽ぶ。記せよ彦中健兒、東北の健兒我に應ふるに萬歲を以てす、何たる悲壯ぞ！、何たる勇ぞ！、且つ九州の快男兒！、福商の健兒、我に寄語す、明年を期してまた花々しく共に中原に鹿子追はんと！

捲上重來復た期すべからず……噫忘るゝなかれ忘るゝなかれ。戰勝と共に。

斯くして年來の望、金色燦として輝く金鳶の優勝旗は三度我が彦中健兒の手に歸しぬ。大會終りて荒木京大總長より優勝旗花環其他種々賞品を受けし選手は應援團の歡呼に守られ、大津市を上へ天孫神社に賽し宿に着きぬ。

今迄騷がしかりし大津の街も暮色漸く包みゴーンと響く諸寺の鐘が昨年の今を思ひ浮ばせて、此の今の喜びに、うれし泣に聲を上げて泣かしめぬ白き漁船は去り、赤き燈火のチラチラと輝く湖上は岸うつ漣のみが今日の觀樂を囁く樣に思はれき六年振りに三度目の武德の旗が金龜城下に飜る。これ元より校友諸君の熱誠なる應援の然らしむる處と一同深く感謝すると共に、將來益々後援あらん事を希ふものあり。

終りに本會の爲、種々御盡力下されし先輩諸兄に滿腔の謝意を表する次第であります。

因に出漕選手左の如し、

第一

C　堀口　兵次
L　藤村助三郎
5　宮尾源二郎
4　川添助二郎
3　坂東　正明
2　西山　利員
1　原田　政藏

第二

C　力石武二郎
L　野寺　勇
5　蓮井　益
4　篁　龍觀
3　村岸久二郎
2　山本　壽彦
1　榎木　伊八

赤鬼倶樂部に就て、抑々赤鬼倶樂部なる者は昨年と同樣五年級諸君よりなる一團にして、本校水上部の練習の應援團なり、是等諸君は端艇部一段の進歩をなさしめんが爲有志相集ひ、選手と共に試驗も他處に炎熱の下に怒濤の中に、規則正しく嚴格なる統一の下に、誠心誠意我部の爲に盡力下され、且本會に參會するや强敵、互救會、櫻倶樂部を一擊のもとに粉碎し、我等に多大の刺激を與へられ、遂に名譽の月桂冠を得しめられしものにして、我等校友會諸君と共に厚く厚く感謝する所なる。

因にメンバー左の如し

C　竹中榮之助
L　高山　四郎
5　生浦　淨晃
4　北村　保
3　野村　嘉藏
2　北川久太郎
1　松下　義夫

本年度の參加校名番組

コース順

第一回　第一　京都第一中學　二着
　　一回　（長濱農學　一着
回　部戰　四日市商業　三着
第二回　全　京都第三中學　二着
　　（福岡商業　一着
　　京都第一商業　三着
第三回　全　（和歌山中學　一着
　　（撫養中學　二着

第四回　仝（彦根中學（第二）三着　愛知一中學一着　丸亀中學二着）
第五回　仝（膳所中學（第二）三着　東北中學一着　宇和島中學二着）
第六回　仝（膳所中學二着　米子中學（第二）三着　米子中學一着）
第七回　仝（彦根中學一着　秋田中學三着　德島中學二着）
第八回　第二部戰（第一回　滋賀師範二着　高知師範一着）
第九回　仝（滋賀師範（第二）二着　八幡商業一着）
第十回　第二部戰（第一回　福岡商業一着　和歌山中學三着　長濱農學二着）
第十一回　仝（愛知一中二着　東北中學一着）
第十二回　仝（彦根中學一着　米子中學二着）
第十三回　倶樂部漕（櫻倶樂部二着　赤鬼倶樂部一着　互救會三着）
第十四回　仝（大津在鄕軍人一着　三育倶樂部二着）
第十五回　特競選漕（京都第一中學一着　京都第三中學二着　撫養中學三着）
第十六回　仝（德島中學一着　膳所中學二着）
第十七回　第二勝部戰（第優八幡商業二着　高知師範一着）
第十八回　第一勝部戰（第優彦根中學一着　福岡商業三着　東北中學二着）

（以上）

琵琶湖縱斷之記　第二選手舵手

我部選手は去歲の武德大會名譽の一戰に武運拙く奮鬪効なく、僅か寸尺にて敢へなくも米子中學に破れ、深き恨を呑みて退陣しぬ。此の怨雪がすんば、彦中五百有余の健兒の名折れと、第一選手第二選手共に猛烈なる練習を開始しぬ。淡き伊吹の山嶺には殘雪を戴き寒風未だ去らず凛として肌を刺す四月の頃より、湖上に艇を出し、水禽と居を同じく、身には汗塗のユーニホーム一枚鉄腕を包みオールも折れよとばかりに滿身を勇を鼓して白波と戰ふ漕脈何ぞ其れ勇壯なる。

會稽の恥を雪ぐべき大會目前に迫る。我等第二選手は三橋君指導の許に一層激甚なる練習を續く、然れども尙進んで腕を練らんことを期し、彦根大津間の遠漕を決行することになしぬ。

七月三十日、有明の月中天に懸る四時、日頃の愛艇比叡號朝の靜寂を破りて鏡面の如き湖上に白身を浮ぶ。用意萬端整ひ、四時半一同意氣揚々出發す。此の日降らず照らずの好日和なり、時に旭日東山の雲間にあらはれ、旭光閃々として湖上を射我等が前途を祝するに似たり。日頃見なれし多景島を遙か右にし、十分或ひは二十分のロンクを試みつゝ沖の島へと進み行く。大上川の川尻の長く湖中に出でたるを柳川の遙か彼方の棧橋をみとめつつ愛知川へと近づけり。愛知川川原の草地を過ぎ沖の島海峽にと差しかかれり。沖の島の山を右に長命寺山を左にし沖の島の村へと向ふ時に十時到着上陸す。人家五十戸ばかり山と山とにはさまれて、島人は漁業或は海運業に從事してゐる事とて船つぎ場には大小の船滿たされたり。同地にて晝食を喫し、約一時間の休養を取り、十二時半沖の島を出發す、時に微風颯々として至る。益漕法に注意をはらひ、二十五の緩調を以て意氣揚々として漕ぐ。時に休息すれは清風颯々として至り、氣爽かに忽ち辛苦忘れ、酷熱を一洗す。完全なるオールを以てロングを試みつつ波に名を得たる野洲川尻を迂廻し、三時堅田に着す。浮見堂を見物し再ひ愛艇身に投じ、大津を差してぞ急ぎ行く。比の時激風俄かに起り、只さざ波のみ立ちし湖上は忽ち激浪と變ず、然れども勇敢なる我々七名何ぞ恐れん意氣軒昂オールにて波頭をいただき互に掛聲して勇往邁進す。時に六時夕陽正に沈まんとして目的地大津模湖の間に見ゆ。一同勇氣百倍、猛烈なるラストヘビーを出しつつ瞬く間に大津紺ケ關沖に姿を現はしつ。嘹喨たる喇叭の音は兵營より

洩れて、我等を迎ふる如し宿佃亭に入れり。池田先生及び第一選手諸兄既に同亭にあり、我等を迎へらる。此に無事大津彦根間の遠漕を終へぬ果して得る所ありしや否や？

水上運動大會記

R　N　生

大正十年五月一日本校創立紀念日を卜し、例年の如く大洞内湖に於て水上運動大會開催さる。

此の日や、昨日來の暗雲尙去りやらず　細雨霏々たり。

祝賀式の前より春雨漸く收まり、日影さへ雲間に表れしかば斷然決行と定まる。式後大洞に至れば朝霧低く垂れ罩めて内湖上一の小波も立たず。巍然として聳ゆる金龜の城は幾百年の瞳を開き彦中健兒の活躍今や遲しと待顏なり。名譽に輝ける數旒の優勝旗、翩翻として朝風と語り、我等をしてそゞろ端艇部の隆昌を思はしむ。例年に增す二竿の優勝旗――は昨年隅田川にて獲取せしもの金色の柏の葉輝然たり。他は大日方氏寄贈の優勝旗にして本日の年級レースを龍蟠虎擲の激戰たらしむ。――共に本日の大會に一段の光輝を添ふ。

蹴漕開始に先ち先輩大日方氏が体育奬勵の爲我が校友會に寄贈せられし優勝旗受納式あり。赤地に白く一中の徽章を拔き金色燦然たる優の字を浮ぶ。見るから血湧き肉踊るの感を惹起す謹んで此處に謝意を述ぶ。

斯くて雨の爲遲延せし準備も漸く整ひ、午前十時三十分號砲一發天空に轟き、大會の幕は切つて落されぬ。

番外　第一選手獨漕　　タイム五分五十三秒

舵手　堀口　兵次　　整調　藤村助三郎
五番　宮尾源次郎　　四番　北　村　保
三番　坂東　正明　　二番　千種　久夫
艇軸　川添助二郎

毎日或はバック臺に或はボートを湖上に浮べて日夜鍛へし鐵腕を示さんと、悠々スタートに就けば號砲忽ち轟き渡りて日頃鍛錬に鍛錬を重ねたるスタート振、いと靡に、オールは水煙を揚げて水に入り、一上一下一糸亂れず漕ぎ進む。數分にして舵手叱咤の聲と共にゴールに近き五分五十三秒2/5のタイムにて決勝線に入りぬ。

選手諸君よ！君等の雙肩には去歲の恨――石塲の汚名雪き、且は彼の一高の優勝旗を再び取るべき二大義務かゝれり。尙一層の奮勵を望む。

第一回　普通レース

白　笠原組　第二着　六分二十二秒
青　西川組　第一着　六分二十秒2/5
赤　北川組　第三着

號砲一發三艇等しくスタートを切り、本日第一回の榮冠を得んと死力を盡して漕ぎ進む。青の力や僅に勝りけん、白に先だつこと一秒2/5にて決勝線に入りぬ。

第二回　普通レース

白　家森組　第二着　六分四十秒
青　澤田實組　第三着
赤　松下組　第一着　六分二十

澤田組五番缺員にて奮戰せしも兵力足らざるを如何せん、無慘の敗北。赤悠々として白を遙か後にして勝つ。

第三回　普通レース

赤　山本鄕組　第一着　六分　九秒2/5
白　植田組　第二着　六分十八秒2/5
青　垣見組　第三着

轟然一發、赤白の二艇脫兎の如く飛び出でしに青は如何にと見れば垣見舵手ゴール繩を舵機繩に引かけて大閉口。漸く漕ぎ出せし時は二艇に後るゝこと一艇身半。然れども青もさる者、猛然として二艇を追擊す、嗚呼、二艇共に本日普通レースに於て最高のレコードを表せし猛者連、月桂冠は遂に赤の頭上に下りぬ。

準備の爲開會遲れ、僅三回にして正午を告ぐる城山の鐘遠く内湖上に響き渡りぬ。

春空に轟く烟火にそゝのかされて一般觀覽者湖畔に夥し。

第四回　普通レース

赤　瀧本組　第一着　六分十九秒
白　野嶺組　第二着　六分二十五秒
青　森俊組　棄權

此れ本日最終の普通レースなり。本年は如何な

ることか、僅に四回にして普通レースは終りを告げたり。某先生曰く「これでは餘りに貧弱である。」と。校友會諸君！次會より奮つて出漕あれ。

森俊組棄權せしを以て二艇の競爭となる。

第五回　倶樂部レース

白　深　緣　林茂組　第二着　六分　二秒

赤　ストン　力石組　第一着　五分五十四秒

青　元　老　那須組　第三着

共に揃ひも揃つた猛者連。深緣は五年生、ストンは四年、元老は所謂元老顏なり。白赤勢伯仲の間にありしが、赤廻航速かにして、選手のタイムに後るゝこと僅か2／5秒にて勝利を得たり。深緣又タイム良かりき。此の時赤の廻航不正なりとて紛議起りしも無事解決す。

第六回　倶樂部レース

赤　青春　松下組　第一着　六分十六秒3／5

白　博愛　家森組　第二着　六分十八秒

第七回　倶樂部レース

白　常盤　大橋組　第一着　六分十五秒1／5

赤　眼鏡　中山組　第二着　六分三十四秒

初より白優勢の聲ありしが、果して赤を後方に退けて勝を得たり。赤は全般眼鏡を掛けた紳士連と見ゆ。

第八回　來賓レース

青　百卅三銀行A組　第二着　五分五十五秒⅕

赤　彦根　第一着　五分四十五秒

腕に覺えのある舊選手大部分なれば、漕法いと鮮かに、兩四艇共に五分臺にて決勝線を突破す。殊に彦根組（赤）は本日競爭中最高のレコードを示し、青を後へに見て名譽の勝利を得たり。敗れたりと雖青の奮鬪賞すべし。

左に某のメンバーを示せば

百卅三銀行A組　中村、村岸、三原、伊豆川、池田賜、林、大野

彦根組　藤田校醫、木ノ下、大平、力石、成宮、吉田、大塚

第九回　寄宿舍レース

白　南寮　第一着　六分十秒

青　北寮　第二着

艇　殆んど伯仲なりしが、回航後青北寮勢盛んにして、意ありてか知らずしてか、青斜に白の進路を奪ひ、アレヨ〳〵と云ふ間に、青白の爲に尻を突かれて敗北す。

因にメンバー次の如し。

南寮　竹原正之　野瀨　竹原正平　柔原　林　伏木　藤堂

北寮　高橋勉　垣見　藤宮　森俊　松井　澤田　中村辰

第十回　對部レース

白　野球部　第一着　六分十五秒

青　武術部　第二着　六分十八秒

對部レースにて連勝の庭球部の顏見わず。武術部は昨年庭球部に敗られ、爾來一ヶ年の修業を重ね、捲土重來の勢を以て復讐せんとするも敵影を認めず。又却りて野球部の爲叩き潰されぬ。左に其のメンバーを示さん

野球部　川瀨、藤本、竹中、牧野、山本鄕、若林、原

武術部　西川半、大橋彌、野口、宮川、木下、山本　茂森

第十一回　來賓レース　直航

赤　百卅三銀行B組　第一着　二分十五秒2／5

青　本校職員　第二着　二分四十二秒2／5

白　來賓

職員レースは毎年興味を以て迎へらる。本年は先生の出漕者少き爲來賓と混合レースを行ふ。先生方も隨分優勢、賞は百卅三銀行B組に下りしと雖も、二分四二秒は例年に比してタイム良好なりそのメンバー左の如し

百卅三銀行　安藤　野瀨　近藤　山田　吉岡　富田　吉村

本校職員　寺島　室谷　松永　本多　森下　笹野　湯本

來　賓　大日方　谷口　久保田　原　松本　秋　山　杉本

第十二回　特選レース

普通レース中第二着にしてタイム早きものを競漕せしむ。此の光榮に浴せる猛者次の如し。

赤　笠原組　第一着　六分八秒

白　植田組　第三着

青　野瀨組　第二着　六分二十六秒

二着の者と雖も流石猛者、六分八秒の良タイムを以て決勝点を突破す。殊に青は三艇中にて先にタイム最も遅き組なり。其の努力察すべし。

特選レースに於てメンバー番組と大差ありしも之に棄權を命ずれば僅一艇となるを以て之を許されたり。

此の榮を擔ひし人名を列記せば

笠原組　笠原　岸田　高橋　山本郷　宇治原　須藤

浦

野瀬組　野瀬　音瀬　竹中　藤居　伏木　北村又　牧

野

植田組　植田　關谷　辻　杉本　生浦　小堀　若林

第十三回　名譽レース

青　松本組　第三着

赤　山本郷組　第一着　六分九秒1／5

白　瀧本組　第二着　六分十秒

本日普通レース中の優者の競漕なり。三艇互角の勢を以て雁行し勝負豫測すべくもあらず。白僅かに1／5秒遅れて當日の月桂冠は赤に降り、銀牌は舵手山本の手に授けられたり。

此の名譽を負ひし出漕者は左の如し

山本郷組　山本郷　箕浦　山岡　目加田　宮川英

大橋武　夏川

瀧本組　瀧本　藤本　松尾　山本壽　榎木　西川

安居

松下組　松下　高山　千菊　垣見　大橋　中村　藤

宮

第十四回　年級レース　三四五年級

本日最終のレースにして而も最も興味を惹く競漕なり。各選手の意氣思ふべし。周到なる用意終りて各々悠々スタートに就く。夕風に飜へる燦然たる優勝旗、今後數分にして何れの手に落つるか？觀衆一同手に汗を握り、片唾を呑んで觀る。轟然として轟く一發の合圖に三艇等しくスタートを切りぬ。廻航までは三軍殆んど互格なりしが、廻航に及んで赤（三年）少しく後れ、ミッドルに至りて、青（五年）は赤（四年）に先んずること一艇身なり。整々として一上一下、一糸亂れず力漕を續く。やがてラストの聲響くや、白よく其の効を奏し、疾風の如く漕ぎ附け、青に肉迫す。青もさる者調子一新し勢悽じく、勝負未だ定め難し。

其の刹那一發の號砲高く湖上に轟き、審判船上に青旗掲げられたり。群衆喝采の聲天地を震動す白は僅か二シートの差にて破れたり。其の想氣察すべし。

（五年級選手）　の聲天地に軋き、爲に湖神も眠りを醒すべし。

爽快なる奏樂裡に優勝旗は五年級選手藤村の手に、銀牌は舵手堀口に授けられたり。暫くして五年級凱歌の聲遠く大洞山の松が枝に響く。此の激戰こ白武運拙く破れしと雖も、其の努力奮鬪賞するに至れり。

因に云ふ。五年級は第三コース、四年級は第一コース三年級は第二コースにして、某先生早く「コースは年級の順にウマク配せられたり。」と。尙四年級選手に二人の欠員生じ番組面と異れるは惜むべし。

終りに各選手のタイム及姓名を記さん。

第五學年　青　五分四十六秒4／5

第四學年　白　五分四十八秒

第三學年　赤

五年級選手

堀口　藤村　宮尾　林　坂東　千種　三原

四年級選手

力石　青山　杉本　川添　原田　野口　岩崎

三年級選手

布施　蓮井　草野　關谷　中村　桑原　藤井

かくて我校の誇とする水上運動大會も終を終げ校長先生の訓辭あり、校友會の萬歳を三唱して解散しぬ。時に三時四十分なり。

尙當日進行係諸君の努力を多とし、左に其の進行表を揚ぐ。

回數	種類	初めの時刻	終りの時刻
番外	獨漕	一〇時三九分三〇秒	一〇時五七分
一	普通	一〇時五六分	一一時一六分
二	仝	一一時二〇分	一一時三五分二〇秒
三	仝	一一時三七分	一一時五一分五〇秒
四	仝	一一時五二分一〇秒	一二時一二分
五	倶樂部	一二時二三分五〇秒	一二時二七分
六	仝	一二時三〇分一秒	一二時四一分三秒

七　仝　一三時四五分二〇秒　一時四分
八　來賓　一時五分四〇秒　一時二四分三秒
九　寄宿舍　一時二四分四秒　一時四〇分
一〇　對部　一時四三分三〇秒　二時
一一　來賓　二時六分二〇秒　二時二八分三秒
一二　特選　二時三九分一五秒　二時四六分一〇秒
一三　名譽　二時四八分八秒　三時〇分〇一秒
一四　年級　三時一〇分二六秒　三時二分一三秒

祝勝端艇大會の記

猛練習に猛練習を重ねし、我が端艇部選手は去んりぬる八月三日、石塲の濱に開かれし國際端艇大會に出塲し、奮戰努力遂によく優勝の月桂冠を得たり

大正十年九月十八日此祝勝端艇大會は長曾根港附近に於て開かれぬ。

午前九時二十分第一回の三艇曳舟八景丸に曳かれてスタートにつく。

此の日たるや連日の雨名殘りなく晴れて、初秋の空には數抹の白雪を殘し、湖上遙か高島の連嶺は輕く浮ぶ、そよ〳〵と吹き來る西風に深江の優勝旗はヒラ〳〵と靡く。折から嚠喨たる樂隊の奏樂の響來ると見る間に、第一回の三艇スル〳〵と鏡の湖上をすべり來た。

第一回　普通レース
一着（赤）　高山組　五、二二
二着（青）　北川久組　五、三二
三着（白）　瀧本組
第二回
一着（青）　澤田組　五、三二
二着（白）　辻井組　六、〇〇
三着（赤）　西川組
第三回
一着（赤）　安食組　五、〇九
二着（白）　安居組　五、一五
三着（青）　杉本組
赤初めより優勢、本日普通レースのレコードたるべし
第四回
一着（青）　伏木組　五、二七
青優勢にして（赤）北村組（白）藤本組を數艇の後に見る。赤、白、決勝綿に入らず。
第五回
一着（白）　新井組　五、二五
二着（青）　高木組　五、三二
三着（赤）　西野組
白のオールよく揃ふ、ラストにて（青）を拔く
第六回
一着（赤）　中山組　五、四二
二着（青）　澤田組　六、〇二
三着（白）　森　組
赤優勢にして一コースより三コースに入る。
第七回
一着（青）　河瀨組　五、四六
二着（赤）　田部組　五、四七
三着（白）　垣見組
赤青腕前互角赤二シートの差にて破るる。青のラストヘビー功を奏す。
第八回
一着（赤）　野瀨組　五、三九
第九回
一着　松下組　五、四二
（白）小山組方向を間違へてゴールオウトす。
第十回　獨漕（優勝選手）
優勝選手の芳名左の如し。
堀口兵次。藤村助三郎、宮尾源太郎、川添助三郎、坂東正明、西山利貞、原田政藏。
タイム　四分三秒⅕
十一回　倶樂部レース
一着（青）　（順札）　山田組　六、〇三
二着（白）　（ブルベル）那須組
十二回
一着（赤）　（デカタン）中山組　五、四〇
二着（青）　（常磐）松本組
赤のオール可成揃ふ。
十三回
一着（赤）　（赤鬼）竹中組　四、四六
二着（白）　（ストン）難破組
（青）　緻棄權
赤鬼は勇者揃ストン奮戰努力せしも遂に及ばず。涙を呑みて勝を敵に讓る、赤鬼又本日の

自眉か。

十四回

一着（白）（横球）竹村組　五、八秒3／5
二着（赤）（四年）力石組　四、五六
三着（青）（三年）布施組
出發に際し各年級の選手を應援する聲盛んなり。流石は五年、再び勝ちぬ。

十五回　對部レース

一着（青）（武術）森　組
（赤）（徒歩）橋本組
（白）（學藝）大崎組
青赤技倆伯仲、決勝点に始んど同時に入り青危くも勝つ、白振はず。

十六回　來賓レース

一着（白）　六、一九
十七回　來賓レース
一着（青）　六、一八
十八回　年級レース
一着（白）（五年）堀口組　四、四二
二着（赤）（四年）力石組　四、五六
三着（青）（三年）布施組
出發に際し各年級の選手を應援する聲盛んなり。流石は五年、再び勝ちぬ。

十九回　特選レース

一着（白）安居組　五、五六
赤優勢なりしがども決勝点去る二百米前方より急激方向を變じ、三コースより一コースに迫れり。爲に青に突かれてオミドとなる。
（赤）高木組
（青）北川組

二十回　名譽レース

一着（青）安食組　五、二六
二着（赤）高山組
三着（白）新井組
斯くして名譽の桂冠安食組に下る、白遙か後れて來る

二十二回　倶樂部名譽レース

一着（赤）（赤鬼）竹中組　六、三〇
（横球）竹村組
（デカタン）中山組　一棄權

赤鬼獨漕し、悠々決勝点に入る。

二十三回　寄宿余對寮レース

一着（赤）（南寮）難破組　六、三五
二着（青）（北寮）澤田組
斯くして祝勝大會は終りぬ。時に午後六時三十分。夕暗愈迫る。
記錄者其の道に暗くして批評の十分ならざりしは殘念なり。乞ふ之を諒せよ

波靜かなる石ケ濱に於ける

朝暾輝々として湖面を照し湖上一点の細波なし噫我等が奮鬪の日、扶搖萬里の風に馭すべき日とはなりぬ。

齊式淋浴第一等ニ後援團總勢二十三名、打ち集ひて前の神社に詣ずるは、云はずとも知れし戰勝の祈願、時は正に午前八時三十分。優勝旗返還式も型の如く終り、午前九時より紺屋關沖より石馬揚ケ濱に至る千百米の漕路に於て琵琶湖上の精鋭初め天下の猛者二百十餘名烈日の下にに橈刄を開かして、舷々相摩し、火花を散らず接戰は、開始されたり。午後二時頃我等後援團の活躍すべき時第拾參回は來りぬ。

噫男子笑まんとすれば當に此の時蛟龍一度雲捲けば行手に敵の影せなし。好敵大津瓦救會櫻倶樂部たるや、年々晴の舞臺に出場し來り、今年も名譽の桂冠を得んものと猛練習を積めりとかや聞く吾等橘城下の赤鬼健兒、意氣既に敵を呑み、奏樂裡に乘艇、瀛州肅々として第貳コースに向ふ。我等此の回にして勝たずんば今迄の苦辛慘憺何の効がある。死す迄オールの折れる迄漕がんのみ。號砲一發三艇等しくスタートを切る。

右舷に瓦救會、左弦に少し後れて櫻倶樂部を見る。初め瓦救會滑り甚だ好く、我に先する事正に半艇身、今や百五十米の頃に至る、時、舵手此處五本！を叫ぶと共に、漕手日頃の賜の力漕數本、見る敵をば拔かんとせり。然るに咄！咄！俄然瓦救會艇首を我が乘艇に向げて進路を遮らんと鬪り後れし櫻倶樂部亦漕調を揚げて後部より我乘艇を衝かんとせり。嗚呼！、我等は此の奸計あるを神ならぬ身の知る由もなし。今や三艇相接觸して無効とならんとす。我等同志今日迄の炎天下の猛練

習の苦辛も一瞬にして水泡に歸せんとする時しもあれ、沈着にして機を見るに敏なる舵手は、突然ヤケ五本！を絶叫し、難關を切り拔けんと圖れり漕手一同漕ぐは今ぞと死を睹して漕ぎし効はあり▽足急に上り、見る〳〵他の二艇を三艇身の後にしつゝ、八百米のボールに入らんとする時、卑怯極まる櫻倶樂部漂着の態度を取り、互救會計畫の畫餅に歸するや、往年の意氣も何處へやら、何等の追求も試みず、我がラストヘビーにより艇差益々增大し、約百米の差を以てゴールに入れり。時を費す事五分十三秒。嗚呼我等が五旬に餘る苦難も今や報いられ、荒木會長より賞を受け、赤鬼倶樂部エールの聲も永久變らぬ石馬ケ濱の波聲と共に殘るならん。

終りに御多忙中にも拘らず、毎日御指導下されし先輩三橋君に謹しんで御禮を申上げます。

赤鬼倶樂部メンバー左の如し

舵手　竹中桑之助
整調　高山四郎
五番　生浦晃淨
四番　北村保
三番　野村嘉藏
二番　北川久太郎
艇軸　松下義夫

劍道部報

樋上記す

□長濱農學校來襲の記

七月二日我が部選手は長濱農學校武術部の挑戰に應じ、本校道場に迎へ擊ちぬ。旬日に亙る梅雨尙逡巡として校庭をうるほし、人心亙陰として迷境に入らむとす。俄然！校内北隅に龍拳虎擲の聲起る。我は湖東金龜城下の雄　彼は湖北の豪、我何ぞ彼に寸地を讓るべきや。校友諸君の熱烈なる御後援に鋭氣勃々として、眉宇に必勝の氣を漲らしぬ。眞野先生より仕合上の注意ありて、若冠羽根田の先鋒にて火蓋は切られぬ。

戰雲は天に漲りて劍電白雨、凄壯の氣場内に充ち、校友諸君の數次第に增し、戰機いよ〳〵熟して劍鋒相摩し、一勝一敗、互に兄たり難く弟たり難き内に秘術を盡すこと十餘回にして、我が運は首尾よく敵の進路を絶ち、遂に彼をして一敗地に塗れしむ。

後に茶話會あり、和氣藹々裡に、四時半再會を約して袂を別ちぬ。

尙當日種々御指導を賜はりし先輩幸島君玆に應援團の諸君より受けし誠意ある精神的の御後援を深く感謝す。

龍虎相擊ちし當日の戰蹟また如何。左にその概略を記して止まんのみ。

一、三本勝負

審判　眞野先生

一（本校　羽根田
長農　○○谷

二（本校　○○野口
長農　○○野瀨光
　　福永

若武者野瀨よく戰ひて、彼をして後に瞠若せしめ、續いて二本をとり、我が軍の士氣また大いに振ふ。

三（本校　桑原
長農　○野本

我よく秘術を盡して戰へ共、如何にせん、遂に彼の爲に機先を制せられぬ。

四（本校　×西依
長農　×龜田

五（本校　○○秋山
長農　篠原

我が校、少壯の勇者また彼をして兜の緒を解かしむる至ること實に數秒。自愛自重せよ秋山。

六（本校　○○野口
長農　大橋

前戰の仇を討たんとしてあせる彼をよく屈せしむ。

七（本校　×○山本壽
長農　×○中村

八（本校　○○小堀
長農　岩田

新進氣鋭の我は彼の狂へる如き太刀を流しつゝ受けつゝ遂に微傷だもなくして遺憾なく彼を膝下に屈伏せしむ。

九（本校　○樋上
長農　○○服部

兩虎太刀をとるや互に秘術をつくして鎬をけづ

りしが、我に神運なかりしにや哀れ露と散りぬ。敗軍の將は兵を談せずとかや。

十（本校　○○中村龍
長農　○廣部

中村モーションにて得意の胴をとり機先を制す彼もさる者、かくてはならじと我に輕傷を負はせしも、我又美事一本をとりて彼を一蹴し去る。

十一（本校　○○木下
長農　山本

現れしは双方共に大男、彼はまた老練なる劍士なり。我は大將なり。我が腕や勝りしならんか、痛快なる横面に次ぎ、また胴を取りて彼をして顏色なからしめ、遂に長農遠征軍の兜を脱がしめぬ

□長濱農學校遠征の記

暑中休暇も、もうあと一日と言ふ七月の二十二日、わが武術部は劍道より木下、樋上、中村、小堀、秋山の五名と、それから柔道部が五名と、共に眞野先生の引率の下に　再びかの長濱農學校を破るべく零時五十分彦根發の滋車で湖北に向ひました。

勝算はしかと我々の胸にあり、たゞ神の力を待つのみでした。彼は去る日の仇を報ずべく、新に陣容をとゝのへて、一舉我を粉碎しようと身構へをしてゐました。彼の應援團は異國の黑船がやつてきたかの樣に、恐怖に滿ちた眼で我々を物珍らし氣に眺め、試合場の入口は黑山の樣にとざゝれたのでした、

死物狂ひの後の太刀先を悠然として折り、又もや聲高らかに凱歌を奏したのです。歡喜に充ちた當日の戰況を記します。

一（本校　○秋山
長農　竹内

我が常勝將軍とも言ふべき秋山は、彼の鋭き太刀を悠々として流しつゝ、常に彼の隙を見つめてゐましたが、彼の身体にかすかな隙を見出した我が秋山は、聲高らかに一本を取り、我が軍はこゝに先攻となりました。

二（本校　○小堀
長農　中村

目まじろむ中に彼の頭をわが前に伏せしめたその手練の巧妙は、この拙い文では表しがたいのです。續いて二点を得た彼が軍は、益々士氣を振はせたのです。

三（本校　○樋上
長農　○岩田

受けつ流しつする内に、彼は我が小手を取り、我は面をとりましたが、おしくも相○ちとなり、我の勝味もありましたが、如何なる天魔の仕ちにや、我は涙をのんで退きました。あゝおしい哉遂に豎子をして名を成さしめたのである。

四（本校　○中村
長農　岩本

鋭い中村の鋩に流石敵の副將も少からずためらひました。そして我の最後の一大刀は彼の致命傷となつたのでした。

五（本校　○木下
長農　○廣部

彼に比すれば少しも我に遜色はないのです。遙かに數等以上の太刀先でしたが、我の得意とせる組打ちが正當なるものであつたのに制止せられまた、腑に落ちない点もあり、有名無實な敗戰だつたと評すべきです。

六（本校　×木下
長農　×山本

前回の敗戰に憤慨せる木下は、敵の御大を破るべく疲勞をも忘れて戰ひました。この戰だつて勝算はたしかにありましたが、何故か引分けとなつたのです。竹刀を落された時は、正當に組打をやるべきであり、やつて毫又も差支なく、そして敵は審判にも我にも組打ちを斷らずしてこれを拒絶したのです。我は不當なる次第だつたので終始これを行ひましたが、審判（長農方）はこれを制止するのです。遂に最後の組打ちに彼は一禮をして退かんとします。そこで審判はまたもや不當な引き分けを宣したのです。

――後記――

今回の遠征は突然でもありまた、仕合中に色々の事情もありましたが、然し彼を見事粉碎したのを喜ぶと共に、校友諸君の御後援を謝します。孰れこの組打ちに對しての問題は明にせねばならぬと思つて居ます。

尚末筆ですが、當日わざ〳〵御出で下すつて、種々御盡力下さいました應援團幹部田部君に深く御禮を申しあげます。

大日本武德會主催

第廿二回青年演武大會出演の記並に夏季練習の記

待ちかねし日の休暇も來りて、校友諸君はバスケットを下げ、風呂敷包みを抱きて、温き兩親の膝下に歸る者もあり、或は登山に、或は旅行に皆喜びに滿ちたる日を送ることゝなりぬ。

されと我等は眼前にせまれる青年大演武會に出演すべき重大責任を双肩に負へる身なれば、金鐵をも溶かすべき三千の烈日を浴びて道場に迚ふことゝなりぬ。盾宇には來るべき大會に於て天下の荒武者を向ふにまはして月の桂を手折らんものと堅き決心の色を浮べて練習を續けぬ。練習中先輩秋山虎三君その他の卒業生諸君の御指導の下に、校友諸君の期待の萬分の一をも盡さばやと、明くる日も明くる日も練習を重ね、二日にて練習の幕を閉ぢぬ

練習猛烈にして過度に亙りし爲中村は遂に涙を

呑みて休養することゝなり、殘る四名の選手、木下長保、樋上亮一、小堀武夫、秋山英三は金龜の堅城をあほぎて必勝を念じ、殘りし戰友の身を語りつゝ異鄕の敵を討たんと征途に就きぬ。沈痛なる聲こゝかしこより起りて必勝を夢みぬ。

「勝たずは生きて歸らじと

誓ふ心の勇しさ……。」

かそして改札口より吐出されたる中の一團となりて、淡路屋に投宿しぬ。明日の戰を畫作しつゝ就寢、いよ〳〵翌日は、天下の槍舞臺に出場せり例年に比して良好ならずとは言へ、勝負は兵家の常なり。たゞ各員自重してその本分の爲に一命を捧げしは最も必要とする處なりしに、皆よく努力してその秘術を表しぬ。欠員の爲對校仕合に出演不可能となりて、校友諸君の御聲援も水泡に歸せしを深く謝して御寛怒を乞ふ。

左にその概錄を記せんとす。

（本校　○秋山英三
大坂天王寺中學　西川　繁）

先鋒となりて出でし秋山は　我が少壯劍師、彼は

煙の都の豪、一禮して立向ふや、彼は守勢となりて我を濛々たる煙の中に引き入れんとす。我少しもあせらず、攻むること十數回なりしも、遂に一本勝負となる。遂に如何なる隙を見出せしにや、「小手ッ」と叫びし一擊に、彼は一たまりもなく慘敗しぬ

（本校　○小堀武夫
兵庫支部　○山本一男）

兩虎の技伯仲の間にありしも、彼の旗色よろしからず、我先んじ「小手」を取る。彼は愈々あせりて狂氣の如く無二無三に打込み來る。彼は武德會支部の使ひ手なれ共、我は初陣の悲しさ、又遂に小手を讓る。兩虎共にその平常を忘れて交戰し勝敗又何時決すとも見ねず。審判は遂に引分けを宣し、萬事休す。

（本校　○樋上亮一
福岡西南學校　○三串一士）

我れまた初陣の武者なれども、金龜城下の龍なり。彼は小男なれども九洲男子にして、その技非凡なり。我れは易々として天晴腦天も碎けよと計り「オ面ダッ」、彼は重傷を負ひてためらひつゝもその精神を發揮して、我が胴を取り、交戰十數名これまた引分となる。

（本校　棄權　中村龍三
大坂天王中學　甘利幾三）

病魔の襲う所となり、涙を飲んで棄權せり。

（本校　木下長保
愛媛西條中學　○○近藤　勳）

我彼と比すれば數段の遜色あるを如何にせん我れベストを盡して力戰すれ共、遂に「小手」「胴」を切られて、無殘の涙を双眸に卓めて露と散りぬ

――戰ひの跡――

校友諸君も少からぬ期待を持ち我等も「今年こそは」と大なる抱負を有せしに、遂に勝戰一、引合け二、敗戰一差引き零となるが如き成績を得しは又殘念の至なりき。戰の跡はまた哀れなるものなり。敗者は慘めなり。我々の腕は未だ未熟なるものなり。奮闘も努力も遂に及ばざりしとは天なる、命なる。敗者の哀れなる一群は六日歸彦しぬ

尚遠征中御盡力を給はりし秋山先輩に深く感謝

すると共に、敗戰を謝し、今後の御後援を希ふ

滋賀縣教育會主催

第六回　縣下演武大會出場の記

十月二十三日、眞野部長引率の許に十余名の金龜健兒は、早朝彦根驛のプラットをなれて、膳所なる滋賀師範にむかひぬ。

午前九時半、大會は開始せられて、我校選手は各々その秘術を盡しぬ。いまその戰況を略記せん

一　本　拔（個人仕合）

岩　泉○――虎姫中學　山田
／○八日市中學　西川

我が先鋒となりて戰ひたる岩泉、難なく「小手」を取りて一本を得、次に八中と戰ひ、兩雄必死となりて戰ひしが、遂に「面」を取られて退く。

羽根田――○八日市中學　圖司

よく戰ひたれ共憐れ「小手」を叫ばれて退く。

野　瀨○――膳所中學　淺田
／○　比叡山中學　尾下
／○栗太實業　横江

數回の戰勝に自他共に許せし若武者と決死を期せる我が野瀨とは、互に激戰數合の後、天晴れ「胴」を切りて、次に比叡山の荒法師を同じく「小手」深く切り込みて、枕を並べしめしも、武運つたなくして名も知れぬ者の手によりて「面」を割こる。

秋　山○――膳所中學　山田
／○長濱農學　横田

すさまじき意氣込の下に、亦もや膳中軍を「オ胴ッ」の一聲に斃せしも如何なる惡運ぞや、遂に「面」を取られて萬事休す。

藤　本○――八幡商業　桂田
／○膳所中學　北川
／○師範學校　片岡

易々として猛る彼を「面」の一擊に勝ちて次に膳中の北川の小手を取る。勝算ありし師範の一卒の爲におしくも「面」を一本とられて露と散る。

田井中――○虎姫中學　高松

我未だその技を振はざるに「胴」を切られて退く。

青　木○――長濱農學　福永
／○大津商業　伊藤
／○虎姫中學　森田
／○長瀨農學　岩本

鮮やかなる「逆胴」を以て長農の一卒を切つて捨て、又もや同じ逆胴を以て大商の猛者を苦なく切りのけたり。我が得意なる逆胴におのゝける虎中を迎へたる青木は、又しても「オ胴」を叫びしも長農の爲に「小手」を取られぬ。

平　田――○滋賀師範　武藤

平田神術を盡して善勝すれ共及ばず「胴」を切らる。

小　堀○――滋賀師範　辻
／○八幡商業　辻本

兩虎よく戰ひたり。然れ共彼は我の「小手」に死す。八商軍の辻本また胴をよく切り遂に屈伏す

中　村――○滋賀師範　横山

病未だ癒ねざる我は氣のみあせれ共、その秘術を出す能はず、遂におしくも「胴」を切られて功成らず。

宮　尾――○八幡商業　辻本

我が小堀の仇敵なり。何ぞ彼に名を成さしめん我が一刀の下に眞二ッになれよと計り切り込めども、彼もさるものなり、巧に逃れて我が胴を切りし爲萬事休す。

團体仕合　比叡山中學　對　本校

辻　○野瀨
北村　○小堀
米谷　○中村
梅山　○秋山
西　○田井中
永合○藤本
南面○平田
岸野○羽根田
喜里山○青木
倉永○宮尾

膳所中學　對　本校

村杉　○野瀨
中西　○小堀
北村○中村

白井○秋山
清水○田井中
北原○藤本
岩佐○平田
檜山○羽根田
平田○青木
筥井○宮尾

を乞ふ。

尙　當日團体試合の取組左の如し。

第一回

比叡山中學對彦根中學
長濱農學校對師範學校
膳所中學校對八幡商業

第二回

長濱農學校對比叡山中學
師範學校對八幡商業學校
膳所中學校對彦根中學校

――後　記――

個人試合は相當の成績を得たりしを喜べ共、團体試合に於て、殊に比中との對戰に於ては、遂に豎子をして名を成さしめ、校友諸君の後援も水泡に歸せしを貴重なる紙上に於て深く謝するものなり。本年は初舞臺の者多かりしと、一つは平素よりの練習の不足なるに基因するものにして深く恥づる次第なり。又木下、及び樋上は脚氣に止むを得ず涙を呑んで出場せざりしは、校友諸君に告げて謝して止まんのみ。

かくして團体試合は作戰そのよろしきを得ざりし爲、僅か八点を得しのみなりしは殘念にたへざる所なれ共、尙來年度に於ける活躍を期して寛恕を乞ふ。

行幸紀念　武道大會記事（劍道部）

十一月十三日、それは僕達彦根中學校の生徒として終生忘るゝことの出來ない榮ある紀念すべき日なんです。この意義ある樂しい日を先生、生徒皆が集つて全部の人がベストを盡して勇壯にそして堂々と日頃鍛へた鐵腕と尙武の心を以て武術大會の一日を送つたのは最もふさはしい催てした。校友諸君の魂の表れとも見るべき當日の狀況を記して益々斯道にはげまれんことを願ひます。

午前校内試合一本拔之部

紅軍　白軍

7 後藤彌 ― 北川壽
山田 ― 姉川
森田 ― 内藤
清水 ― 日比
3 北村四 ― 天方
植田 ― 橋詰
島津 ― 上田由
岩曾 ― 小野與 4
福山 ― 石田
1 谷 ― 小川千
長谷川 ― 淺岡 5
3 中居 ― 岩佐 2
2 猪田 ― 角田
1 橋本久 ― 林惣
堀居 ― 近藤德
3 三原秀 ― 近藤
1 梅本 ― 若林 1
大橋 ― 津田

奥村 ― 藤林
岩崎 ― 藤井 1
宮田 ― 吉田良 8
北村 ― 渡邊 1
蒲生 ― 相塲 1
角田 ― 橋本章
1 中川 ― 古川
1 伊藤倭 ― 前橋
4 長崎 ― 村岸英 5
藤關 ― 朽木
西埜 ― 細野
北村省 ― 井上
樋口二 ― 北川 1
4 藤谷 ― 松尾 1
1 岩崎 ― 正野 1
1 增田 ― 水谷 2
1 布施 ― 服部 2
小久保 ― 林幸 1
1 鹿谷 ― 高崎 1
秀林 ― 岩泉 2

1 上橋村岸
1 森本吉澄1
1 西村片倉
山田藤田1
2 羽根田大彌彌1
2 鹽谷吉田3
1 蓮井桑原
1 細田伊藤
野瀬西依5
平田川添
2 藤井原田
1 松下竹中
松下茂坡東
中山北川
岸田山田
堀口西山1
7 山本藤本
4 秋山垣見
湯本青木
田井中平田2

副將　宮尾　副將　小堀1
大將　大將
◎木下　中村

一本拔成績表

一等　八本　吉田良次
二等　七本　山本壽彦　後藤彌一
三等　五本　西依考治郎　村岸英太郎
淺岡勝榮

賞外

四等　四本　秋山。藤谷。小野。長崎。
五等　三本　吉田。三原。中居。北村。
六等　二本　平田以下九名。

午後からは八幡商業を初めその他數校の選手諸君と對校試合ひを行ひました。わざわざお出で下さいました皆さんに對して深く感謝します。

午後對校三本務負之部

一（彥根東小學校本）　○田谷君　○○北村四
二（彥根工業學校本）　下村君　○○岩泉

三（彥根東小學校本）　小林君　○○羽根田
四（彥根工業學校本）　富田君　○○森本
五（彥根工業學校本）　木村君　○○野瀨光
六（長濱農學校本）　○○服部君　○○藤本
七（長濱農學校本）　○山本君　○○平田
八（八幡商業學校本）　○○大島君　秋山
九（八幡商業學校本）　○○伴君　○○中村

競技の進行の方も可なり速かつたし、諸君が皆熱心に腕を奮つて下すつたので至極上首尾に本日の大會を終ることを得たのはほんとに愉快でした。

校友會長の閉會の辭があつて一同が解散したのは方に三時でした

乍末筆紙上に於て當日御足勞を願ひし審判員、その他來賓各位に深くお禮申上げます。

寒稽古記

校友會雜記の〆切までに本稿を終へましたので、我が部例年の壯擧たる寒稽古の記事を記載することのできないのは何よりの殘念な事でした。唯こゝには部としての豫告でなく私等理事としての想像、豫想を記載します。

城山から凍つた樣な鐘の音が五ツ聞ゐますと温い床を離れて武者振ひをしながらマントを被つて雪の降る中を道場へ走つたのが頭の中によく殘つてゐます。

今學年もまた一月の十日前後から初るだらうと思つてゐます。大正十年度は百餘名の出席者があつて七十何名の皆出席を見ました。寒稽古に通ふのは誰しも樂な事ではありません。併しその苦しいのを我慢して二週間をすごしたその最終日の愉快はまた格別です。我々が最上の修養機關とも言ひ得るでしやう。

本年は擔任の眞野、本多、室谷先生の御熱心家計りでなく、校長先生を始め、新しく見ゐた斯道に御熱心な樣に承つてゐる杉山先生なども見ゐるのですから昨年に倍した好成績を擧げ得るだらう

と大なる期待を以てその日の來るのを待つてゐます。

折角御奮勵下さい赤鬼の小分子よ。

大正十年 記錄の最終に及びて

——回顧錄——　記錄擔當日生

振はなかつた第十春の我が武道部、私は回顧してこれだけの短い言葉となつてしまつたのを悲しみ、又恥ぢるのです。春尙淺い新學年の際に我々一同は選手たるの大命をうけて今日に至るまで敗又敗、熱誠なる應援團諸兄をして幾度か落膽せしめた事でせう。弱い物にも弱い丈の特とせられる或ものがあります。我々は死力を盡して研究もしました苦痛もなめました。それにこの細い腕は諸君の面前に於て何等の花々しい戰勝の報をもたらす事のできなかつたのはその責任はこの細い腕にあるんです。思へば涙の歷史でした。不振の第十春よこの間常に貴重なる部費と諸君の熱誠なる魂の應援をして水泡に歸せしめたに過ぎなかつたのです。

敗者の手記を終るに及んで、また部を去り、學校を去るに及んで、來年度の新しき選手諸君に、もつともつと美しい、榮ある歷史を編れんことを希望します。

因に大正十一年度選手左の如し（イロハ順）

岩泉。羽根田。西依。田井中。中村。野口。野瀨。藤本。小堀。靑木。秋山。平田。

（一部異動するやも知れず、）

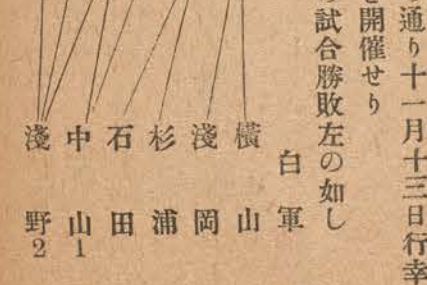
行幸紀念 武道大會の記

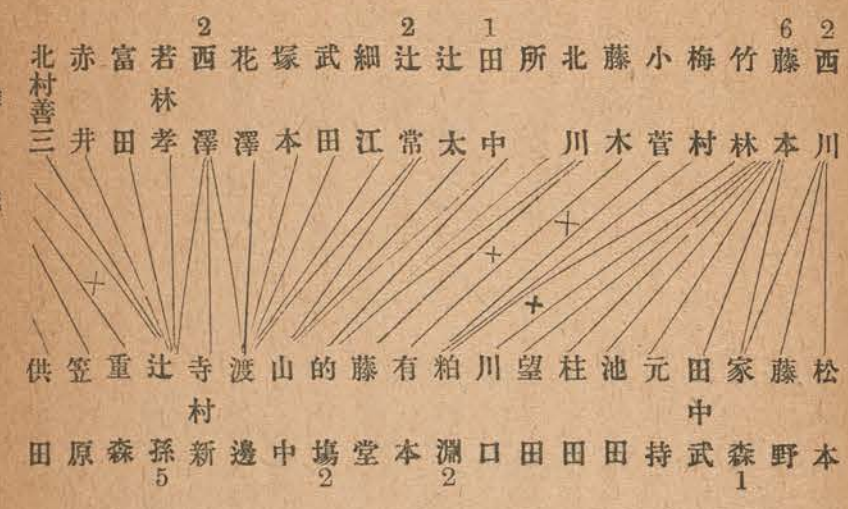
（柔道部）

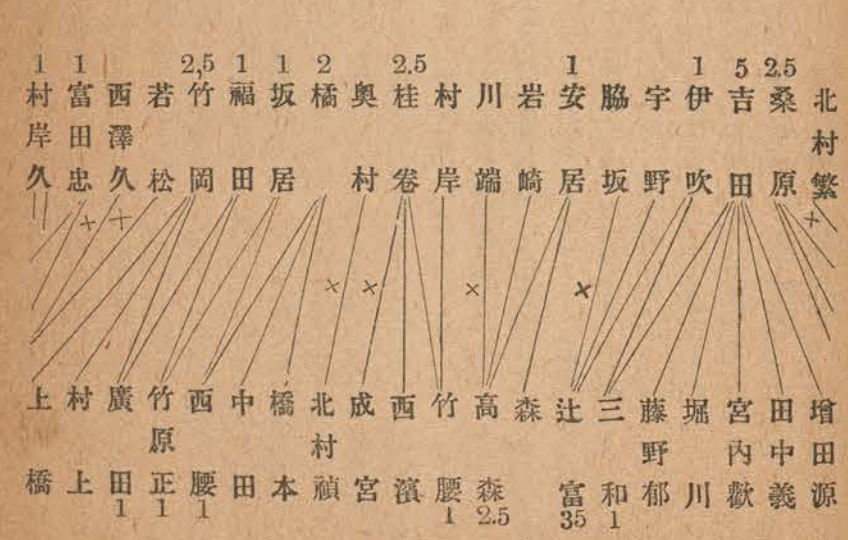
我が武術部は例年の通り十一月十三日行幸記念日をトして武術大會を開催せり

當日の紅白の試合勝敗左の如し

紅軍　白軍







大橋武　圓域
一守　中川治　草野
1竹中　角田　北川　古池　山梶　富田
2森俊　村田　森　北村又　小島
3杉本義　下郷　北澤　堀江1　上野　小林
1竹原　富田義　箕浦1　木村　2種原正　石
1西川　植田　瀧本　須藤　牧野俊　川添1　大橋孫
1牧野文

副將　1宮川　三原
大將　大將
茂森　◎松本2

○白軍の勝

○紅白試合雜報

紅白試合開始　午前九時……午後一時終り
紅軍出六十二名……缺員三十八名
白軍出七十四名……缺員二十七名
二本勝　十二名
紅白試合は白軍の勝
○當日優勝者の人名左の如し
一等　藤本　元傳（一年）　勝六本
二等　渡邊彦太郎（三年）　勝五本
同　辻　孫四郎（一年）　勝五本
同　吉田　諦（一年）　勝五本
三年　杉本義三郎（四年）　勝三本
以上五名

晝食休憩

○對校試合　（一時半開始）
（二時半終り）

揚武館東小學校×（長谷川鋭吉　澤田明義　工業學校　本校×（小林芳太郎　堀川辰之助
揚武館本校○○（林幸次郎　宮川英二　長本　農○（入松九二三　茂森德二郎
長本農校○○（高橋義祐　松木幹一　八本　高校×（西村敬三　山本郷三

青年大演武會の記（柔道部）

T S 生記

炎帝熱を放ちて、四海爲に沸き、烈陽灼々として、堤柳庭綠、盡く死するが如く、疊々たる火雲は、天地を薫灼し、街頭の砂礫は、毒氣を蒸騰し屋上の鬼瓦は、火焔を吐かんとする、この三伏の夏、身骨も碎けんばかりの猛練習、流汗瀧の如く恰も身は釜中に在るが如き想あらしむ。百折撓まず、千挫屈せず、斃れて後止むの猛練習振り、金龜城下の赤鬼健兒たる我が柔道部選手の意氣込や如何ばかりなりけむ。見知らぬ武德殿を想ひ浮べては、兩手を擴げて突立つ先生に死力を盡して武者振り附く、想ひは必勝せんとよりは何の雜念もなし。斯く異鄕の敵を滅さんと一意專心猛練習を重ぬる事、約二旬、遂に出征の時機や到來せり。即ち葉月六日黎明校友數多の歡呼の聲に送られ、我が柔道部赤鬼選手五名は、隆々たる双腕を撫しつゝ、多大の希望と責任とを以て、金龜城を後にして洛陽に向ひぬ。赤鬼選手の血は迸り、元氣旺盛云はん方なし。明くれば七日、武德會第二十二回青年　演武會は開かれぬ。早朝一行は、神に武運を祈りつゝ宿舍を出でぬ。朝曦將に昇らんとして、東天紅々、宿雲山河を包んで一望際なく、一陣の曉風徐ろに、稽古衣の裾に吹き訪ひ、宛然奮勵一番天地を震動せよと私語するに似たり。我等一行武德殿に到るや既に數百千の選手眼を光らせて控ふ。武德殿內の物凄さ、何にか譬へん。開會後、程なくして試合に移れり。